

「つるいの子」第四五号の発刊に向けて、児童生徒へご指導いただいた先生方、並びに校務ご多忙の中、編集に当たっていただいた教育研究所の担当の先生方に心から感謝申し上げます。

さて、自分の思いや考え、喜怒哀楽などを伝える手段はたくさんあります。話（声）、表情、動作、文章、音楽、絵画、写真など様々です。こうしたたくさんさんの表現手段も、受け手の入り口は視覚経由と聴覚経由の二つしかありませんが、目（文字）と耳（声）違う入り方をして同じなのが言葉です。「養老孟司特別授業坊ちゃん」（NHK出版）の中で彼は「音楽は耳がないと聞こえません。絵は目がないと見えません。しかし言葉はどうでしょう。文字ならば目で読むことができる、話していることは耳で聞くことができます。耳から入ってくる音、目から入ってくる文字、それぞれの処理が完全になると言葉になります。」と述べ、人に何かを伝える表現として言葉は「最も高度なものと言えます。」と述べています。視覚情報と聴覚情報の「重なり」あるいは「境目」にあるのが言葉なのだそうです。このロジックは難しくてよくわかりませんが、まあ、視覚・聴覚両方で伝達できる「機能」をもって「高度」と言っているのだと思いますが、発音が同じ言葉でも違う意味の場合もあったり、言葉のもつニュアンスを考えると、言葉で伝えることは伝えやすくもあるし伝えづらくもある、そういう意味で使い手にとって「高度」な力が求められるとれます。たぶん：

「つるいの子」は、子供たちが創作した詩、短歌、俳句、川柳、随想などを掲載していますが、特に詩や短歌、俳句は、短い文章あるいは限られた文字数の中で、自らの感動を言葉で伝えるものです。創作していく過程では、言葉の大切さを理解し、適切な言葉を選択していかなければなりません。韻や比喻など表現技法も多彩で、言葉の使い方の試行錯誤を重ねながら創り上げる経験は、表現力を身に付ける良い機会です。また、端的に伝えることのできる表現力は、将来の大切なビジネススキルにもなることでしょう。たぶん「つるいの子」の発刊の意義はそこにあるのではないのでしょうか。これからも、鶴居の子供たちが、「つるいの子」を通して「表現力」を磨きあげ、豊かな人間性を備えた「鶴居びと」に成長することを期待しています。